

論文『三つの一神教における宗教と紛争』（全10回）

第6回、十字軍と宗教対立

担当：塩尻和子

1、聖戦はキリスト教の思想

キリスト教とイスラームは同一の伝統上にある兄弟宗教である。どちらもユダヤ教を母胎とし、同じ「神」を崇拝し、同じ系列の聖典を戴き、同一の預言者たちを敬う宗教である。しかも、西欧社会とイスラーム世界との対立が1096年から始まった十字軍運動によって明確になるまでは、一般のキリスト教徒にとってムスリムは宗教上の敵ではなかった。同様にムスリムにとってもキリスト教徒は長い年月、同じ地域に住む隣人でもあり共同体の一員でもあった。

十字軍は聖地奪回という目標を掲げてはいたが、実際には宗教的情熱よりも、当時のヨーロッパにおける政治的矛盾と社会的混乱の解決法として、世俗的な目的のために結成されたことは、当初から明らかである。しかし、200年にわたって展開された十字軍運動は、キリスト教徒にもイスラーム教徒にも、互いに敵意と偏見を植えつけるには十分過ぎるくらいであった。

中世のキリスト教では、戦争や政治から大きく距離を置いていた初期の教義と対立する「正義の戦争」の概念が展開された。その指標となったのはアウグスティヌス(354-430)である。アウグスティヌスはルカによる福音書14章23節「街道や垣根のところに出かけて行って、この家がいっぱいになるように、無理にでも人々を連れて来なさい」を論証として、異端者に対する戦争を正当化した。その後、「無理にでも」という言葉が、教会による暴力行為を容認することになった。キリスト教の「聖戦思想」はこのあたりから始まったと言われている。

アウグスティヌスの正戦の思想はトマス・アクィナスに受け継がれたが、トマスによれば、一定の倫理的基準を満たせば、戦争が正当化されるという倫理的な基準が提示された。しかも、キリスト教がローマ帝国の国教として採用(392年)されて以降、ローマ教皇も宣教の拡大のための有効な手段とみなして戦争を容認し、それ以降、キリスト教世界には戦争が止むことはなかった。

今日、安易に「聖戦(ジハード)」はイスラームの伝統からもたらされたと考えられる傾向があるが、ジハードは本来、「努力」を意味する言葉であり、「奮闘努力」とも訳される。これには二つの意味があり、精神的宗教的な修行を意味する「大ジハード」と、対外的な

郷土防衛戦争を指す「小ジハード」に分けられる。外敵の侵略に対抗する防衛的な「小ジハード」が全ムスリムに課せられる個人的な義務でもあったということは、ジハードが一般に理解されているような「聖戦」ではなく、むしろ合法的な「正戦」であるということを示している。しかもこの正戦が発効するためには、以下の規定に従わなければならない。

- ①ムスリムの領土に外部から異教徒が侵攻してくる場合に限られること、
- ②カリフの指揮のもと、全ムスリムが一致して参戦すること
- ③一般市民や婦女子などの非戦闘員やキリスト教の修道士や僧侶、ユダヤ教のラビなどの宗教者に危害を加えないこと

この原則に従えば、ジハードはあくまでイスラームの宗教のためであること、戦う相手が異教徒であること、という二つの条件を満たして初めてジハードと呼ばれる資格が生じる。イスラーム法に従うならば、ジハードとは異教徒の攻撃からの自衛に限定される戦闘行為となる。（『イスラーム、生と死と聖戦』中田考著、集英社新書、28頁）

2、「神の平和」

一方のキリスト教の側からは、9世紀から10世紀にかけて、「異教徒との戦争は正戦である」という理念が確立し、教皇たちは、キリスト教化していないノルマン人や、ムスリムという異教徒に対する戦争で命を失った者はすべてが永遠の命を与えられると確約した。本来なら政治的な意味を持つ「教会外」の異教徒との戦争が、侵入者から教会と修道院を守るための「教会内」の防衛戦争だとして、いわば政教一致的な判断が教会の側からも許可されたが、それは防衛戦争にとどまらず、やがて攻撃的な侵略戦争へと移って行った。

この間に、異教徒との戦争に従事する役割をもった騎士階級が台頭してきた。騎士階級や豪族たちは外部へ向かう戦争が一段落すると、ヨーロッパの封建領主同士による領土争奪戦が激しくなり、内部抗争へ向かうことになった。このような事態に対して、986年頃、教会は「神の平和」という平和促進運動を展開したが、この運動の中心となったのがクリュニー修道院である。騎士階級は教会の指導の下で、「神の平和」を獲得し維持するための平和軍となり、「教会によって是認され、教会のために遂行される聖戦」に従事するようになった。

この「神の平和」運動によって、スペインでは1050年からのレコンキスタ（再征服活動）も聖戦とみなされるようになり、1096年以降の十字軍運動を招来することにつながった。このどちらもがムスリムを敵と措定している。この短い期間にもさまざまな聖戦が行われたが、教皇グレゴリウス7世は叙任権闘争の中で「キリストの軍務」（聖職者を指す）という概念を「聖ペテロの軍務」と言い換え、教会のために徴集された騎士集団の意味として用いた。教会の戦士として召集された騎士は、騎士叙任式によって特別な集団とみなされ、妻帯の禁止など、聖職者と変わらない禁欲的な厳しい規則が科せられた。

こうして、教会は平和ではなく、キリスト教国を異教徒から防衛するための戦争を実施する機関として、決定的な方向転換を行った。当時、教会のおもな敵とみなされたのは、サラセン人（ムスリム）とノルマン人、そしてキリスト教の異端（特にアルビジョワ派、1209~1244）である。1054年に教会が東西に分裂（ローマとビザンティンとの分裂）したことも、教会統一の理念が東方への遠征という軍事行動の計画を促進したとも考えられる。キリスト教会に生じた聖戦の理念と、教会の活動に奉仕する戦士階級としての騎士集団が、十字軍運動を準備し、最終的には実現させたといえることができる。

他方、イスラームの「啓典の民」という保護民システムは近代にいたるまで（例えばオスマン朝のミット制、1921年まで）維持されてきたが、このような共存の歴史は、現代の国際的対立の影に押しやられて、振り返ろうとする人は少ない。現在のイスラーム社会が、キリスト教に対して頑なになっている面があるとしたら、それは宗教教義によるものではなく、9世紀以降のキリスト教勢力によって発生してきた、イスラームに対する政治的・経済的無理解や蔑視によるものである。

3. 十字軍運動にみる政治と宗教

十字軍運動とは、11世紀末から13世紀末まで続いた、西ヨーロッパ諸国による地中海東岸地域に対する遠征・植民活動を指す。一連の十字軍運動の端緒となる第1次十字軍（1096-99）は、セルジューク朝（1038-1194、トルコ系のイスラーム王朝）にアナトリア半島を占領された東ローマ帝国の皇帝アレクシオス1世コムネノスが、1095年にローマ教皇ウルバヌス2世に救援を依頼したことが発端となった。アレクシオス1世が要請したのは、単に東ローマ帝国への傭兵の提供であり、十字軍のような大規模な軍団ではなかったが、このとき、教皇ウルバヌス2世は大義名分としてイスラーム教国からの聖地エルサレムの奪還を訴えることになった。

教皇は1095年11月にクレルモンで行われたクレルモン公会議で、集まったフランスの諸侯や騎士たちに向かってエルサレム奪回活動に参加するよう呼びかけた。彼はフランス人たちに対して聖地をイスラーム教徒の手から奪回しようと呼びかけ、「乳と蜜の流れる土地カナン」という聖書由来の表現をひいて軍隊の派遣を訴えた。それがヨーロッパを包み込むほどの大熱狂を引き起し、諸侯や騎士階級だけでなく、巡礼者や農民、破産者なども含まれる巨大な軍団を形成した。

十字軍運動の要因は、セルジューク朝によるキリスト教徒住民および巡礼者への迫害がその原因であると解釈されることが多いが、それを裏づける明確な証拠はない。イスラームではキリスト教徒は「啓典の民」としてイスラーム支配下では保護民であり、彼らが聖地エルサレムへ巡礼の旅に出ることは、むしろ歓迎されていたからである。

当初十字軍はシリア地方の政治的混乱に乗じてエルサレムを含むシリア海岸部を征服し、のちに、エジプトに対しても遠征を行うようになった。しかしシリア内陸部を統一したヌールッディーンが1148年にジハード（聖戦）を宣言して、数度にわたって十字軍を排除し、さらにシリア・エジプト両地方を支配したサラフッディーン（1138-1193、サラディン）が1187年にエルサレムを再征服すると、十字軍の勢力は徐々に縮小していき、1291年には最後の砦アッカがマムルーク朝（1250-1517）の手に落ちた。こうして地中海東岸の十字軍国家は滅亡したが、その後も続いたイベリア半島でのレコンキスタや、マムルーク朝・オスマン朝などのイスラーム支配下の領土に対する軍事行動を、広義の「十字軍」とみなすこともある。

十字軍の遠征については、ヨーロッパ側とイスラーム側の双方に十分な歴史的資料が残されているが、同時代のアラビア語史料には「サリービーユーン（十字軍）」という言葉はほとんどみられず、代わりに「フランク人」という言葉が使われていた。当時のムスリムにとってキリスト教徒は「啓典の民」で隣人であり、敵とはみなしていなかった。また、十字軍を宗教的熱意に基づく戦士集団というよりは異世界からの侵略者として見ていた。

十字軍運動の期間を通じて、つねに双方が交戦状態にあったわけではなく、実際には、十字軍時代初期のイスラーム君主たちは他の君主を牽制するために、後期のアイユーブ朝、マムルーク朝の君主たちは政治的安定のために、十字軍との間に和議を結ぶことも多く、またイタリア商人らを媒介とした経済的交流、それにとまなう文化的交流も途切れることはなかった。

4, 十字軍と文化交流

第1回十字軍のエルサレム占領の後、騎士たちはシリアとパレスチナに「エルサレム王国」(1099-1187年)を建設した。エルサレムとともに、エデッサ、アンチオキア、トリポリの4国で構成し、なんと1187年にアイユブ朝のサラフッディーンによってエルサレムを奪還されるまでほぼ100年近く持ちこたえ、西洋から新規に到着する騎士や巡礼者を受け入れる植民地を運営し、東西の文化交流にも貢献した。エルサレムを失った後はアッカ(アッコ)に移って、勢力の挽回に努めたが、1291年にマムルーク朝に滅ぼされた。それでも、十字軍は、イスラーム軍勢に包囲されながらも、その支配を1096年からほぼ195年間も保持したことになる。

エルサレム王国に住んだ十字軍の貴族たちはイスラームの文化を少しずつ受け入れ、次第にイスラームに融和的な姿勢をとるようになっていった。イスラーム側もこれを政治的に利用するようになり、地中海貿易などの面でも協力することがあった。

これに対し、西方からあらたに十字軍としてやってきた将兵はイスラームに敵対的な態度をとり、第2回十字軍の時に十字軍国家と同盟関係にあったダマスカスを攻撃するなど現地の事情を理解せずに軍事行動を起こすことも多く、両者は十字軍内でもしばしば対立を起こしている。現代の西洋史家の中には、十字軍は破壊的な行動だけでなく、イスラームの文化を祖国に持ちかえり、東西の文化交流に貢献したと評価する人もいるが、それは微々たるものに過ぎなかった。

十字軍の中には、今日まで語り継がれる醜聞もまた多い。その一つは説教師のアミアンの隠者ピエール(ペトルス)に率いられた民衆十字軍である。クレルモン公会議の決定を受けてヨーロッパ各地の諸侯や騎士は遠征の準備を始めたが、十字軍の熱狂は民衆にも伝染し、1096年、本隊が出発する数ヶ月前に、隠者ピエールに率いられた民衆や下級騎士の軍勢4万人がフランスからエルサレムを目指して出発した。これが民衆十字軍と呼ばれるものである。

民衆十字軍はまずライン川沿い一帯の都市(ラインラント)で裕福なユダヤ人を襲い、彼らを虐殺して物資や財宝を奪って軍備を整え、ハンガリー王国や東ローマ帝国内でも衝突を繰り返しながら小アジアに上陸したものの、統制の取れていない上に軍力も弱く、セルジューク朝の地方政権であるルーム・セルジューク朝によって蹴散らされ、多くのも

のは殺されるか奴隷となった。しかし指導者の隠者ピエールらごく一部は生き延び、第 1 回十字軍へと再び参加した。

このように十字軍兵士の中には、征服地のムスリムだけでなくキリスト教徒やユダヤ教徒まで残虐に殺害しただけでなく、それらの遺体を食糧として焼いて食べるという蛮行を行ったことも見聞されている。本来、イスラーム治下では保護民であり、隣人同士でもあったキリスト教徒が、遠くから十字軍として襲ってきて略奪や虐殺を繰り返したことは、ムスリム側にキリスト教徒に対する不信感や不寛容の意識を増加させるようになり、そのトラウマは現代でも消えていない。今日の過激派集団「イスラーム国 (IS)」が欧米とそれに参加する有志連合の国々を「十字軍」と呼ぶのは、このような歴史的経緯を踏まえてのことである。

5、レコンキスタ

レコンキスタ (スペイン語: Reconquista) は、718 年から 1492 年までに行われた、キリスト教国によるイベリア半島の再征服活動の総称である。711 年にイベリア半島に侵入し領土を獲得したムスリムから、キリスト教徒が領土を奪還していった運動である。後ウマイヤ朝による西ゴート王国の征服とそれに続くアストゥリアス王国の建国から始まり、1492 年のグラナダ陥落によるナスル朝滅亡で終わる。レコンキスタはスペイン語で「再征服」(re=再び、conquista=征服すること) を意味する。日本語では国土回復運動とされることもある。

キリスト教徒は 8-9 世紀にイベリア半島北部に諸国家を建設し、これらは統合、合体、分離を繰り返しながら南部のイスラーム勢力と戦い、領土を拡大していった。このため、カスティーリャは内乱 (第一次カスティーリャ継承戦争) に突入した。トラスタマラ伯エンリケは、アラゴン王国の支援を得て異母弟のペドロ 1 世に対抗した。1369 年、エンリケはペドロ 1 世を排除し、エンリケ 2 世として即位した。これによって、カスティーリャ王国の王統はトラスタマラ家に交代した。

1474 年、イサベル 1 世がカスティーリャ女王に即位した。彼女の夫はアラゴン王太子ジローナ公フェルナンドで、共同統治王としてフェルナンド 5 世と称される。1479 年、フェルナンドがフェルナンド 2 世としてアラゴン王に即位すると、これによってカスティーリャとカタルーニャ=アラゴンは実質的に統合され、スペイン王国 (イスパニア王国) が誕生した。1482 年、グラナダで発生した内乱を好機と見て、カスティーリャはグラナダへの

侵攻を開始し、1490年にムスリム勢力最後の拠点グラナダを包囲した。グラナダは2年間にわたる攻囲戦を戦ったが、1492年1月6日、アルハンブラ宮殿が陥落し、最後のイスラーム王朝ナスル朝は滅亡して、レコンキスタはここに終結した。

(1492年はスペイン王の支援を受けてコロンブスがアメリカ発見の航海にでた年でもある。大航海時代の始まり)

レコンキスタの成功の要因は、当時のキリスト教世界で発生した宗教的情熱が契機となり、スペインのサンティアゴ（聖ヤコブ）・デ・コンポステーラへの巡礼の情熱と関連している。一方のイスラーム側は、まさに東方での十字軍の遠征時と同じように、宗教的情熱とムスリムとしての一体感が薄れており、スペインでのキリスト教徒、ユダヤ教徒、ムスリムとの共存に甘んじていたようである。レコンキスタ後、スペイン王権はカトリック信仰に基づく国家統一をめざし、直ちにすべてのユダヤ教徒はキリスト教に改宗して洗礼を受けるか、4ヶ月以内に国外退去しなければならないとした。その結果、15万人ないし20万人のユダヤ人がイベリア半島を去ったといわれている。

それまでイスラームの信仰を維持してきたムデーハル（キリスト教勢力に征服された土地でそのまま暮らしていたムスリム）に対しても、16世紀初めには、キリスト教への改宗か国外退去かの二者択一を迫った。イスラームからキリスト教徒へ改宗したものをモリスコと呼ぶが、改宗を選択したモリスコの中には、それまでと同様にアラビア語を話し、隠れてイスラームを信仰し、アラブ風的生活習慣を守った者も多かった。

スペインの支配者たちは、モリスコにイスラームの信仰を禁止し、アラビア語の使用やアラブ風の服装などを禁じたために、モリスコは1568年から1573年にかけて数度の反乱を起こした後、スペインから強制的に追放された。特に東部のヴァレンシアとアラゴンでは、モリスコだけでなくユダヤ教徒も、地元民の職を奪うライバルとみなされ、1609年から1614年にかけて国外へ追放され、最終的に数十万のモリスコがイベリア半島から北アフリカへと追放された。

レコンキスタは、ムスリムだけでなく、これまで共存して社会を建設し文化を築いてきたユダヤ教徒をも追放することによって、イベリア半島から文明の担い手を失うことになった。その結果、熟練労働者が失われ、住民がほとんどいなくなった領地も見られるようになり、多くの貴族が没落した。

このことは、ほぼ千年もの長期間、イベリア半島を中心にして当時の世界中に大きな影響を与えたイスラーム文明の存在が否定されることに繋がり、その代わりにヨーロッパとギリシアの特別な関係が主張されるようになった。西洋文明史では 21 世紀の今日でも、科学文明がギリシア・ローマから直接、ルネサンスへと受け継がれたという主張が主流を占めている。東京大学名誉教授で文化功労者の板垣雄三はこのような主張について「文明の土台を全否定するものだ」として「欧米中心主義が犯した古代ギリシア横取りの所業の跡が歴然となってきたことは、もはや誰も否定できなくなりました」と批判している。（「南原繁『国家と宗教—ヨーロッパ精神史の研究—』を読み直す」15 頁）

しかしヨーロッパの学者の中にも、以下のようにイスラームとイスラーム文明を正当に評価する専門家もいる。

ほぼ全中世を通じて、またほぼ全領域にわたって、西欧は、主として農業社会であり、封建社会であり、修道院の栄えた社会でした。これに対しまして、イスラーム世界の強みは、大都市、富裕な宮廷、それにそれらを結ぶ長い連絡網にあったのです。したがって、基本的には、独身を尊び、聖職をあがめ、階層制を理想とした西欧に対し、イスラーム世界は、じつに寛大で、官能的で、原理上平等であり、思弁の自由を享受する俗人の持つ考え方をもち、両者は対照的でありました。・・・九・十・十一世紀のイスラーム諸国が、十四世紀に至るまでの中世キリスト教世界よりも、はるかに多量の、はるかに多種の、学問上の業績や科学上の成果を残したことは、疑う余地のない事実であります。（『ヨーロッパとイスラーム世界』R. W. サザン、22-23 頁）

このようにして、イベリア半島のキリスト教徒の中には、アラブ風の衣服をまとい、アラビア語を日常的に話し、アンダルス文化を地方の人々にも伝える役目を果たした者、モサラベが現れるようにもなっていた。スペイン領主とアラブ領主との友情関係の例としては、映画にもなった「エル・シド」がある。

ロドリゴ・ディアス・デ・ビバル（Rodrigo Díaz de Vivar、1045 年? - 1099 年 6 月）、通称エル・シド（El Cid、「ご主人様」の意、エル・シーとも）は、11 世紀後半のレコンキスタで活躍したカスティーリャ王国の貴族。叙事詩『わがシッド

の歌』の主人公としても知られる。エル・シドはイスラーム軍からカスティーリャを奪回したとしてレコンキスタの英雄として讃えられているが、「エル・シド」という映画に描かれているように、イスラーム支配者とも親しく、共にアラゴン王国と戦っている。ブルゴスにあるエル・シドの騎馬像 (Wikipedia より)



シリアに現存する最大の十字軍の城、クラック・デ・シュヴァリエ城（騎士の城）、世界遺産に登録されている。



現在、地中海のマルタ共和国に残るマルタ騎士団は、12世紀、十字軍時代のパレスチナに発祥した聖ヨハネ騎士団が現在まで存続したものである。今日ではマルタ騎士団は領土を持たない独立国家として認められ、世界の慈善運動に貢献している。現在では本部はローマにあり、騎士は名誉職になっている。写真はマルタ騎士団の行進。



サラディン（サラーフッディーン・アイユーブ、1138—1193）

クルド人として生まれたサラディンはエジプトのカイロを首都とするアイユーブ朝のスルタン（王）となり、勇猛果敢で慈悲深い賢王として知られた。サラディンが十字軍からエルサレムを奪回したことを知ったキリスト教世界では、聖地回復をめざして第3回十字軍が起こされた。ドイツ王、フランス王、イギリス王の三国王が参加して出発したが、ドイツ王は途中で亡くなり、フランス王は引き揚げ、結局サラディンの相手となったのは、イギリス王リチャード1世（獅子心王）だけであった。リチャードは直接エルサレムを攻撃することを避けながら果敢に戦ったため、戦況は一進一退となった。サラディン側も戦線の収束に迫られ、両者の間で1192年に講和が成立、エルサレムに対するサラディンの主権が認められる代わりに、キリスト教徒の聖地巡礼も保証された。この戦いによって、サラディンの勇名がヨーロッパに伝えられ、十字軍中、最高の騎士だと称えられた。今日でもイスラーム教徒側では唯一、ヨーロッパで賞賛される人物である。